●認定 NPO 法人絆・代表理事：山﨑紀恵子さんのお話

【絆について】

・絆は 31 年目、ラソ＝「絆」（スペイン語）、スタッフは 110 名、ボランティアは 150 名。最初ボランティアも会員制度を設けていたが、会員制度を外したらボランティアが増えた！

・必ずみんなで話し合いをして決める。トップダウンではなく、ミッションに沿うことを大切にしている。

【グリーン・ラソについて】

・9 年目。グリーン・ラソの良かったことは公的な建物で行えていること。社協とも協力し、行政と一緒に作った居場所。

・この場所は元々「グリーン」という喫茶店で、モーニングを食べながら和気あいあいとした感じに「これいいな」と感じていた。拠点があればつながりができる。その後グリーンから社協のミニデイサービスになり、それも終わることを聞き、ここで「居場所をやりたい」と行政に掛け合った。

・居場所を始めるにあたり、「ランチを毎日」というのがポイントだった。行政に伝えても言葉だけではなかなか伝わらなかった。神奈川県藤沢市にモデルとなるような居場所があり、行政職員に（赤字だが）300 円で見学ツアーを実施。こんなのが東浦町にもあったらいいよね！とアピールした。

・この居場所は誰でも来ていい。始めてみたら、重い障害のある方、エイズの方、精神障害のある方、認知症の方・・・いろんな人が来る。自己選択、自己決定を大切にしている。

・ランチはまかないシェフランチで提供している。今は 22 組の団体がいて、提供は各 50～60 食と決めている。

・居場所は場所があるだけでは意味がない。当番をおいて声かけをしてもらう。当番も地域の人とのつながりを楽しんでいる。

・取り組みやイベントはみんなの「これがやりたい、あったらいいな」の要望で始まる。（見学日のイベント）囲碁将棋マージャンもその 1 つ。でも日時を決めず、いつ囲碁将棋マージャンしても OK としていたら人が集まらなかった。金曜夜と決めたらすごい人が来た！日時を決めず場所だけでは無理だということを学んだ。

・（当時の）東浦町長に紹介してもらった「かさでらのまち食堂」の宮本さんを講師に迎え、居場所セミナーを開催した。ワークショップをやろうとなり、多職種の方が集まりいろいろな意見をもらいどうすると良いか考えた。その中で「地域の縁側」なのに「縁側」がないという話になり、縁側をつくるコンペを企画。建築系学科等の大学に手紙をだしたところ 10 チームが集まった。コンペの結果、名城大学のチーム（3 名の学生）が採択され、縁側は地域の人とみんなで作った。その当時の学生が今もメンテナンスをしてくれている。

・以前東浦町に住んでいた方が戻ってきて、前より地域が疎遠だなと感じたから何かやりたいと相談を受けた。その方に場所（グリーン・ラソ）を貸して「地域食堂」をやっている。「誰かのやりたい」を応援するのも役割だと思った。（自分と）年代が違う人がやると子供とママも来るようになった！

【ラソ・プラザについて】

・最初「宿題塾」は有料にしていたが、今は無料にしている。無料にすることで教育委員会や企業とつながることができるメリットがある。

・「サロン DE ショップ」はご自身だけで買い物ができない人のために一緒に買い物をするボランティアがいて送迎もする。バイタルチェックもする。

・「フリーマーケット」は全部 100 円、売上は地域のために使う。ボランティアはできないけど、物なら提供できると言う方もいる。

・モーニングからビールが飲める！

●一般社団法人はんだのたね・事務局長：池脇啓太さんのお話

・コココリンは愛知県の「ステーション AI」の地方版みたいなところ。

・今のまちづくりのトレンドを知る。

・「いつのまにかできたね」ではなく、途中のプロセスを楽しんでもらえるように地域の人を巻き込んで楽しむ！看板を建て、建物ができる前に街頭でお知らせ、コココリンに入るカフェは珈琲を販売して通りがかる通学通勤の学生や会社員に挨拶をした。「敷地内の草取り」「コココリンの模型お披露目会」「ハーブの種を通じて未来の産業人を生み出す（※)」等、公開イベントとして開催。（※）子どもたちがハーブの種を買い、蒔き、育てた苗を二週間後に集合、子ども自身で各自のやり方で販売する企画。

・建物の配置にあえて角度をつけたことで人を感じつつ程よい人との距離感に。

・DIY しやすい余白（関わりしろ）を残す。室内の壁はクロスを貼らず、必要に応じて DIY できるようにしている。

・情報発信は市報や SNS。

・行政はワークショップ、市民の意見を検討材料にあげようとしてくれ、その姿勢がありがたい。

・ワークショップの成果（下記）

→行政から言われたのではなく自発的に。行政に要望するだけでなく自分達でという意識が芽生える。

→20～70 代の参加者それぞれが発信してくれた。

→ワークショップ参加者が新たな人を連れてきてくれる。

→ワークショップ参加者（ネイリスト・小学生のママ）が「とても面白いが伝わっていない。私がワークショップをやる！」とワークショップを開催。すると行政が集められないような人たちが集まる！その場でリアル配信している人も！

→「障がい者の意見も取り入れないと」とワークショップを開催。

→行政が意見を取り入れてくれたこと、かたちになってきていたことで、やりたいことが叶えられるかもと感じられる。